

Title	松村高夫・解学詩・郭洪茂・李力・江田いづみ・江田憲治著『戦争と疫病：七三一部隊のもたらしたもの』
Sub Title	
Author	鈴木, 晃仁(Suzuki, Akihito)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2002
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.95, No.2 (2002. 7) ,p.453(263)- 455(265)
JaLC DOI	10.14991/001.20020701-0263
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20020701-0263

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



松村高夫・解学詩・郭洪茂・李力・江田いづみ・
江田憲治 著

『戦争と疫病

——七三一部隊のもたらしたもの——』

本の友社，1997年，442頁

冷戦の終結から過去10年余りの期間は、細菌を中心とする生物兵器を用いた生物戦争（Biological Warfare, 以下BWと略記）の脅威が大きくクローズアップされた時期である。1991年の湾岸戦争の終結とともに、イラクが生物兵器を本格的に準備してきたことが明らかになった。1985年の開発の開始からわずか6年で、炭疽菌やボツリヌス毒素を大量に生産してミサイルの弾頭に装着しうる形を整えたこと、そして現在知られている中で最強の発ガン物質であるアフラトキシンという新手の生物兵器が研究・開発されていたことは、BWの「脅威」が現実のものになっていることを国際社会に認識させた。92年には、ロシアのエリツィン大統領が、生物兵器禁止条約（1975）に違反して旧ソ連が大規模な生物兵器の準備を行ってきたことを認めた。それと同時に、1979年にスウェルドロフスクで起きた炭疽病の流行は、当時の西側諸国の告発どおり、生物兵器の秘密工場からの炭疽菌の拡散によるものであり、ソ連が当時主張した自然原因による食肉の汚染によるものだという説明が虚偽の捏造であったことも認められた。冷戦下の軍事超大国が強力な生物兵器を大量に所有していたこと、そしてそれに端を発して大規模なバイオハザードが起きたことが、まぎれもない真実として突きつけられたのである。1995年にはオウム真理教がいわゆる地下鉄サリン事件を起こし、その後の捜査の結果、教団が炭疽菌を東京にばらまいたことも明らかにされた。国家では

なく、一宗教団体が化学兵器と並んで生物兵器を開発し、被害こそ出なかったが人口密集地へのテロ目的のために使用したことは、BWの拡散が新たな局面を迎えたことを人々に思い知らせた。そして2001年の9月に起きた国際貿易センタービルへの自爆テロの衝撃の只中にあるアメリカが、郵便物に付着させた出所不明の炭疽菌によるテロ行為によって追い討ちを掛けられたことは、我々の記憶にも生々しい。皮肉なことに、この事件の2ヶ月前の7月、生物兵器の全廃に向けて過去7年間にわたって検討されてきた議案をブッシュ政権が拒否し、国際社会を失望させたばかりのことであった。

このように生物兵器の脅威が急速に拡大・深化した時期は、1980年代以降のAIDSのパンデミーやエボラ出血熱などの局地的な流行など、「致命的な感染症の再来」が恐れられはじめた時期とタイミングが合致した。こういった状況を受けて、医学、公衆衛生、安全保障の研究機関などがこぞって生物兵器をめぐる問題の本格的な研究に着手し、ジャーナリズムにおいても、本格的なリサーチに基づいたノンフィクションの力作が数多く出版されている。こういった動きと密接に関係しながら、歴史研究においても、BWを主題とした研究が、90年代の特に後半に急速に充実した。かつての良い意味でも悪い意味でもジャーナリストイックな、生物兵器の隠された実態を暴くことに主眼を置いたスタイルの研究から、質の高い資料のソリッドな実証に基づき、BWの実態を社会的・政治的な文脈に関連付けて分析する本格的な歴史研究への転換が急速に進んでいる。これらの研究の多くは軍事史、国際政治史、医学史などの視点が絡み合う学際性が高いものである。もうひとつの特徴は、国際性が高いことである。これは、20世紀の軍事大国の多くが共通して生物兵器の軍事的な有用性を認識しながらも、戦中と戦後の経緯が、日本、イギリス、アメリカ、ドイツ、ソ連などにおいて大きく違うことから、格好の比較研究の対象になるという事情が大きく影響して

いる。生物兵器の歴史の研究は、かつてつきまわっていたキワモノ的・陰謀説的な雰囲気を取り除き、現代史研究におけるメインストリームのトピックのひとつとして確立される方向に確実に向かっている。そして、そのことを日本と中国の文脈で鮮やかに証明しているのが、この書評が取り上げる松村高夫らによる論文集『戦争と疫病——七三一部隊のもたらしたもの——』である。

膨大な資料を緻密に分析した優れた歴史書は、往々にしてその主張を極めてシンプルに表現できるものだが、この書物も例外ではない。本書の狙いは、松村が第1章の冒頭近くで簡潔に表明している。「731部隊の問題を狭く平房のなかだけに限るのではなく、細菌戦の実施との関係で総体としてみること」(10頁)である。731部隊による中国人の捕虜や政治犯を対象にした凄惨な人体実験は、日本では森村誠一の『悪魔の飽食』で広く知られ、英語圏においてもシェルドン・ハリスの *Factories of Death* (1995) によって人々に知られるところとなった。本書『戦争と疫病』は、これらの閉ざされた空間で起きた残虐行為は、より広範な、非戦闘員を対象にした軍事作戦の準備のためであることを改めて思い出させ、その文脈の中に置きなおしている。731部隊を、石井四郎という冷血漢が引き起こした孤立したエピソードとして扱うのではなく、より大きな枠組みの中に置いた本書は、歴史研究として731部隊の研究を確実に洗練させた。そして、松村の言葉は、英語圏におけるBWの歴史研究にもそのままあてはめることができるだろう。これまでの英語圏の研究は、秘密裡に行われる開発の場の力学や、政治・軍事の中核における意思決定に注目しており、細菌戦の被害をうけた地域とその住民の研究は手薄であった。人類学者ジャンヌ・ギユマンによるスヴェルドロフスクのフィールドワークに基づいた *Anthrax* (1999) などと並んで、松村らの著作は、国際的な研究状況で見ても新しい問題を開拓するものである。

本書に収録された論文の実証的な水準はきわめ

て高い。江田いづみによる第2章は、家畜を対象とする細菌戦を受け持った100部隊が検討され、その活動が、陸軍の獣医学校や伝染病研究所などの広いネットワークに支えられていたものであることを論じている。解学詩による第3章においては、中国の東北地方における40年のペスト大流行が石井らの謀略活動の結果ではないかという仮説が提示され、さまざまな状況証拠からその論証が試みられている。第4章の李力による論文は、浙江省と湖南省における731部隊によるペストを中心とする細菌作戦を、日本側の資料、中国側の被害と防疫活動の資料、そして攻撃を実行した隊員の日誌を組み合わせることで詳細に論証している。第5章は、日本と中国からさらに国際的な広がりをたどった論文であり、湖南省常德へのペスト攻撃に際して、日本軍が中国に細菌攻撃を行っているという科学的な根拠を持つ発表が始めて行われたが、その報告書がイギリスとアメリカの細菌戦の専門家たちによって証拠不十分というかたちで否定されたさまが松村によって分析されている。6章では、これら一連の攻撃に対する中国政府による防疫活動の背景が江田憲治によって明らかにされている。郭洪茂による7章では1946年から48年の東北地方の大きなペストの流行が、731部隊が飼育していた大量のペストノミとそれが付着したネズミが、部隊の退却に際して、謀略的に配布されたことによるのではないかという仮説が提示され、論証が試みられている。三たび登場した松村による終章は、5章の議論を引き継いで、戦後、数々の懐疑的な批判を乗り越えて日本軍による細菌戦の実施が明らかにされた過程をまとめている。

本書が出版された翌年の1998年、本書でも言及されている朝鮮戦争中のアメリカによる中国と北朝鮮に対する生物兵器攻撃の疑惑に関して、二つの相反する重要な議論がほとんど同時に提出された。ひとつは産経新聞のモスクワ特派員が、明らかにされていないルートで入手したロシアの文書館の秘密文書である。そこには、ソヴィエト共産党の上層部が、中国と北朝鮮が証拠を捏造したこ

とを知っていることが書かれており、研究者の中には、この文書がアメリカの無実と中国の謀略的プロパガンダの決定的な証拠であるとみなすものもある。もうひとつは、カナダのヨーク大学で教鞭をとる歴史学者のエンディコットとハグーマンが、アメリカと中国での詳細なリサーチに基づいて、決定的な証拠こそはないが、アメリカが石井四郎から得た細菌戦のノウハウを使って中国と北朝鮮にBWを実施した可能性は極めて高いことと主張した書物である (Stephen Endicott and Edward Hagerman, *The United States and Biological Warfare*, 1998)。これらの証拠と主張をめぐって、予想されるとおり、賛否両論に分かれた激しい論争が始まっている。2001年のHistory誌に掲載されたトム・ブキャナンの論文は、ニーダム文書などの新たなアーカイブ資料を読み、これも決定的ではないが、エンディコットとハグーマンに対して批判的な結論を導き出している。アメリカによる朝鮮戦争中の生物兵器の使用の真偽をめぐって、「歴史家たちの戦争」が始まっている。この論争は、これからのBWの歴史研究の一つの大きな焦点となるだろうが、本書はこの論争においても直接間接に大きな役割を果たすだろう。

一方で、日本軍による細菌戦については、この論集の執筆者たちや他の多くの研究者の努力によって、その真偽が問われる局面は終わったと言っ

ていいのではないだろうか。悪意がある懐疑主義者を説得するために、大多数の歴史学者にとっては十分すぎるほど確実な議論を、さらに証拠を積み上げて論証しなければならない段階は乗り越えられた。日本軍による細菌戦が「起きたかどうか」ではなく、「どのように、そしてなぜ起きたのか」という質問が正面から取り上げられる時期は熟している。英語圏のBWの歴史研究の中では、国際比較研究の視点も入れながら、この問題に答えようという試みが既に始められた。松村らが開いた新しい段階の生物兵器の歴史の研究の扉は、高度なヒューマニズムと歴史上かつてないほどの大量殺戮が並存した時代であった20世紀というパラドクス、そして殺戮のための医学研究という、私たちが既に慣れてしまった巨大な矛盾を、文化と社会の総体の中で理解する手がかりを与えてくれるだろう。このメカニズムを的確に理解することなく、テロリストや「ならずもの国家」を力で屈服させようとするだけでは、生物兵器という21世紀の脅威に立ち向かう方向は見えてこないだろう。その意味で、本書はこれからのBWをめぐるさまざまなディシプリンの研究の国際的な礎石の一つとなることは疑いない。

鈴木 晃 仁
(経済学部助教授)